この著作物は著作権法によって保護されています／This content is protected by the Japanese Copyright Act

フランソワ・プルー
「“新しき奇妙な教育者たち”
——読書の危険と文学的治療薬
(1883-1914)」(翻訳)

立　花　　史

要旨

第三共和制の最初の数十年、懸念を表明する言説たちは、過剰な量の風紀を乱す読み物の影響で、若いフランス人男性たちが「文学中毒」の犠牲者になっている様子だとして、「文学中毒」を告発している。エッセイストや教育学者らは、魅力的で健全な読み物を通じて、青年たちが、分別と節度をもって文学を愛読する術を学ぶ必要性があると認めている。ポール・ブールジェとモーリス・バレスのような多くの作家はと言えば、読書の危険に対するパラドキシカルな警告を表現するために、読者と読者的な登場人物との同一化を駆使して、教育的性格を持った小説を提案している。

(序)

観察者たちによると、世紀転換期の若者は、「徹底的に風紀を乱す」文学が伝達する「精神生活の病」を患っている。治療薬の練り上げは、文学者たちにとってパラドキシカルな職務となる。書かれたものを通じて、読書が伝達する害悪を、いかに治癒すると主張すればよいのか。

19 世紀末、フランスの若者たちは、出身地に関係なく、文字を読むことができた。1881 年と 1882 年のフェリー法が、初等教育を無償化・義務化し、フランス革命から前進して来たフランス国民の読み書き教育を完遂した。

「悪しき書物たち」が、犯罪へと、あるいは道徳違反のセクシャリティへと、つまり道徳の破壊へとそそのかす、読書の危険についての言説は、19世紀を通じて見られたが、今回は、若い読者という新たな懸念対象をめぐって再び展開された。ボヴァリー夫人が、世紀半ばにおける、堕落しやすいとか素朴であると見なされた新興の読者――女性、労働者、田舎者（Lyons：2001）――に対して不安を掻き立てつつ何度もなされた総括の象徴であったとするなら、第三共和制の初期の数十年のあいだエッセイスト、教育学者、小説家にとって懸念材料となるのは、むしろ若い男性である。批評家たちの想像では、読書の学習と概略的な文学教育によって、往々にして貧しい家柄の、世紀末の若い男性は、雑多な読み物の寄せ集め（ロマン派の詩、ニヒリズムの哲学、みだらな小説）に自由にアクセスできるようになり、これらが若い男性の危険な手本となった。1897年、アルフレッド・フイエの記事をきっかけとする論争が、こうした不安の影響力を例証している。フェリー法の15年後、統計を根拠にフイエは、フランスにおける青少年犯罪率の際立った増加を確認している。直接の因果関係が証明できていないことを認めつつも、この哲学者は、万人に対する教育の「間接的な作用」を考え、読み書き教育の背徳的な効果を糾弾している。「文字を読めねばならないという義務に、すべてを読もうとする性向と、最悪のものを読んでしまう不可避性のようなものが付け加わる」。フイエにとって、「公教育の主要な帰結は、新聞と小説のあまねく普及だった」。この普及は、想像を「血まみれにしたり汚したりする」。こうした悪影響にさらされるのが、まずもって青年期という「臨界期」であるだけになおさら、この脅威は深刻である。

若年層を主要な懸念対象と見なして、フイエは、批評家で小説家のポール・ブールジェが1880年代から主張していた文学論を伝え広めている。『現代心理論集』の第一シリーズ（1883）の序言で、ブールジェは、とりわけ青春期において各人の発達に対する読書の多大な影響を強調している。「伝統と土地特有の影響がどんどん目に見えて衰退する中、書物が大いなる先導者となった。自分の意識の奥底を見つめて、もし一冊のある本を読んでいなければ今とまったく同じ自分ではなかっただろうと認めないような人は、私

たちのうちに誰もいまい。[…] まさにこの瞬間、この文章を書いているときに、私が眺めている一人の青年が教室机に肘をついている」（1883：487、強調〔傍点〕は作者）。ブールジェにとって、書物は読者を形成し変形する力を有していて、この力は、ジャンルや本の良し悪しの区別とは関係なく、あらゆるテクストを通じて発揮される。意味深い仕方で、ブールジェが喚起する象徴的な読書の光景には、人物像として一人の青年がいる。一世代全体を体現する「大学生」という典型的なこの人物のもとで、相反する影響力が対立している。「伝統と土地特有」の力――家庭の力、宗教の力、地域の力、国の力という意味で理解しておこう――が失墜する一方で、書物の力が優位を占める。ブールジェは、自分の『論集』を、こうした文学の力――暗に、リビドー的、懐疑的、パリ的、外国的な力――の調査として提示している。それも、「著者たちの人間性」に関心を示すようなサント＝ブーヴのやり方ではなく、むしろ「精神生活の歴史家」の見地によるもので、ブールジェによれば、精神生活を構成する「諸要素」のうち、文学は「おそらく最重要」なのだ（1883：435）。それゆえ、近年と同時代の文学に関する研究は、最大程度に、国民の精神生活を心配する層の関心を惹く。ブールジェにとっても同時代の大勢にとっても、書物は、〔普仏戦争でナポレオン三世が捕虜となった〕スダン[1]以来、フランスを襲った害悪の兆候であるばかりではない。新興世代を形成するものである以上、書物はこうした害悪の主要因の一つなのだ。そのため、世紀の新たな転換期には、治癒の方途を示唆することが急務となる。

ここで私たちは、これらの問いを二段階に分けて検証することを提起する。第一に、エッセイストや教育学者が、読書の潜在的な危険を確認しつつ、若者たちを熟練した読者にする必要があるとする点で、どのように意見が一致しているのかを示すことだ。第二に、この総括を記憶にとどめている小説家たちが、教育的な性格を持った小説を提示して、時には――ブールジェの場合だが――奇妙なことに文学を放棄するよう説くに至ることになるのを、私

1）フランスの「退廃」の診断は、1870年以降、増えてゆく。とりわけ Swart, 1964 を見よ。

たちは見ることになろう。

快楽と余波

1890年代のあいだ、中等教育改革についてのしばしば紛糾した議論に引き続いて、多くの教育学者が、青年たちの読書実践の効果を検討している。ブールジェとまったく同様に、こうした論者は、制度的かつ伝統的な学習仲介者の影響の衰退を引き合いに出す。社会学者ガブリエル・タルドは、青少年犯罪率に関するフイエの統計的推論を退けつつも、教育そのものよりむしろ、教室を出るやいなや生徒たちがさらされる悪影響への不快感の存在は認めている。「我が国の学校の生徒たちは、宗教懐疑論、不遜で野心的な虚栄心、早熟な強欲、悪徳といった、さまざまな毒を盛られたミルクを吸ってきた」(1897：459)。これより数年前、公教育視学長官のフェリックス・ペコーは、初等教育に関する報告書で同じ不安を表明していた。「私たちが庶民の子供たちに読む訓練をしているのは誰のため、何のためなのかと、不安な気持ちで自問してしまう。[…] 新しき奇妙な教育者たちに、つまり、あれらの安価な小説雑誌に、風紀を乱すあれらの二束三文の冊子に、教育を受けたこの子たちをゆだねるためなのだろうか」(1894：307)。フイエとペコーを引用しつつ、文学評論家のガストン・デシャンは、彼の論争的な試論『民主主義の不快感』(1899) のある章でこれらの懸念を要約している。この章のなかで彼は、並行する二つの学習システムの不穏な共存を記述している。一方は、国家が養成した教員たちの保護と監視のもとでなされる「教室内」の学習であり、もう一方は、あらゆる制度的なチェックをすり抜ける「教室外」の学習である。「たしかにフランス人は教室内で学ぶことができる。だがフランス人は、教室外で、いっそう多くのことを学んでしまうのだ。[…] 彼は、授業プログラムに登録されていないことを学ぶという不可抗力の性向を有している。彼は、教育者たちの支配をすぐに逃れてしまうのだが、それと同じくらい、新聞、演劇、書物に無防備のまま篭絡されてしまう」(1899：198–199)。この図式では、青年は、善意に基づく強制的な教育システムの支配を逃れて、すぐさま、印刷物の誘惑に、わざと屈するのだ。国民教育は、未来の市民たちの調和的で構成の確かな発達を目指しているが、学生たちは、自分がいっそう大きな快楽をみいだす自主的な読書によって惑わされた者として記述されている。

デシャンにとって、印刷物は、その快楽が新興世代を汚染するような一連の誘惑に属している。この論客は、そうした無数の脅威——小説、新聞、戯曲——を「ポルノグラフィ」[2] (1899：111) という総称の下に再編成する。デシャンにとって、1899年のフランスでは、国民文学の名に値するものは一つもなく、「玉石混交の本屋」があるのみで、これは、デシャンが、パリの書籍商のもとへ啓蒙されに訪れるよう読者をいざなうとき、まったく文字通りの価値をもった主張となる。「フラマリオンの店舗の前をぶらついてみたまえ。鮮やかな光が、新刊の青、黄、赤、紫、緑、赤紫の表紙を色づかせる。太い字で、内容が面白そうなタイトルが並んでいる。最新の恥ずべき書籍たちが、重版のおびただしい回数を誇っている。[…] こうした書籍の山から、甘えるような馴れ馴れしい懇願の騒々しさが漂って来る。“わたしはどう？　ムッシュ、私を買ってよ”と」(1899：112)。ここで、けばけばしい色で飾られた新刊の小説たちは、それぞれのタイトルが表紙の下に楽しみがあることを保証しており、客になってくれそうな男たちに対して軽々しくおねだりしてくる娼婦たちのごとく描かれているのが明らかだ[3]。部数の多い出版社が「貿易省ではなく、公教育省から、しばしば勲章が授けられている（おお、皮肉なことよ！）」ことをデシャンが指摘するとき、教育ツールが求められているにもかかわらず、さまざまな本のこうした驚くべき寄せ集めが、売春のやっかいな魅力とともに、またもやデシャンによって思い起こされている。彼の説明によれば、このことは一見とっぴに見えるとしても、あながち間違っていない。「ポルノグラフィの関係者たちは […] 実際、彼ら自身、教育者である」からだ (1899：202)。「ポルノグラフィ」——すな

2) とりわけゾラ作品に対するこうした告発は、1880年代と1890年代の批評的言説でよく見られる。

3) ポルノグラフィと売春のアナロジーは、18世紀でも19世紀でも紋切り型の表現だった。この件については、Dean, 2000：35–41を見よ。

わち著者デシャンにとって、現代の文学的所産のほとんどすべて――は、学校で学習した能力を、承認されていない仕方で使用させることに尽きるどころか、教育者の役割を簒奪して、批評家と教育学者が声をそろえて有害なものと特徴づける別種の学習を、若い読者たちに勧めてくる。

新興世代は、1870年の敗北に引き続き、幾多の懸念の対象だった。売春、ポルノグラフィ、性病を心配する言説があちこちで繰り返され、そこに、都市化、脱宗教化、出生率の低下への不安が付随していた。こうした現象はすべて密接につながっていて、さらには交換可能のように見えた。つまりいずれもが、憂慮すべき国の衰退の原因であると同時に兆候として糾弾されていた（Dean, 2000：35–50）。ポルノグラフィの糾弾においては、梅毒の災禍の場合と同じく、若年層が、強い恐れの対象となった。若い男性たちは、共和国の未来を表現しているのみならず、大人ほど自己制御に適していないため、危険に対していっそう脆弱だと考えられていた。かくしてデシャンが「かつてないほど、私たちの言葉の反響が、私たちの読み物の余波が、私たちの娯楽の伝染が若年層を襲っている」（1899：199）と憤慨するとき、彼は暗黙のうちに区別を設けていて、それは、深刻な影響を受けることなく読み物、芝居、その他の娯楽で気晴らしのできる大人たちと、大人ほど節制できず、影響の危険に対して無防備そうな若者たちとの区別である。若年層のこうした脆弱性は、この層の知識や経験の欠如として記述されるものにも関わる。そのとき「ポルノ的」な読み物は、若者が手にするべきでなく、まだ心構えのできていない知識に、若者をさらしてしまうがゆえに、まったく特殊な危険を体現する。世紀の転換期に梅毒の専門医であったアルフレッド・フルニエにとって、ポルノグラフィは「幸福で健全な夫婦の清廉に対する脅威であり、その帰結として、国民に対する脅威である。――というのもポルノグラフィは、若者のセクシャリティを、時期尚早な広告にゆだねてしまうからだ」（Surkis, 2006：197）。同様に、ソルボンヌの教育学者フェルディナン・ビュイソンからすると、およそ高貴さとは程遠い欲望を早まって掻き立てる、まさにその威力のゆえに、ポルノ的な文学と言われるものは「敵」である（1894：22）。こうした論理は、多くの文学ジャンルに拡張可能だ。

というのも読書はその本性上、男性であれ女性であれ読者が、その者の経験とは異質な想念に接触し、経験とは異質な状況を想像するよう促すものなのだから。これらの可能性は、読書による数ある娯楽に属していて、デシャンによれば、そうした娯楽を、大人たちは節度を持って嗜めるが、若者たちにはそれができない――「余波」の脅威はそこに起因する。

若者にとっての読書の危険に対するこうした特徴づけは、時代を同じくする売春や性病についての言説と、意義深い構造的類似を有している。フルニエは、青年が持つ二重の脆弱性――頼りない自己制御と不十分な知識――として彼が記述するものに対し、二重の戦略によって一時しのぎの策を提案する。第一に、パンフレットと教室や授業での紹介を通じて、率直でわかりやすさを心がけた科学的な言語表現を使い、若い男性たちにセクシャリティの教育をおこなうよう勧めている。かくして若者たちは、自分が直面しかねない危険を熟知し、慎しんで振舞おうという気持ちになる（Surkis, 2006：198–204）。第二に、ナポレオン執政下で制定され、19世紀を通じて維持された、警察と医療による売春の監視を支持している（Harsin, 1985）。フルニエにとって、こうした監督は、若い男性の経験の乏しさと自己制御のおぼつかなさを考えるなら、彼らの健康に対してとりわけ重要である。実際、フルニエは、売春婦のもとに足しげく通うことによる危険を警戒するよう青年たちに呼びかけつつも、このような注意喚起がつねに効果的で十分とはかぎらないことも認めている。その一方で彼は、若い男性が、さまざまな売春形態に触れて結婚前の手ほどきを受けるよう奨励する対抗言説の存在を、いくらか経験を得て「悪しき習慣」を振りほどく手段として承認するというか少なくとも容認する。こうして売春宿は、適切に監視されれば、若い男性の性的好奇心に対するリスク管理されたはけ口であるのみならず、自己制御の教育場所とも見なされる。採用されたこの妥協案は、自制能力のある市民の育成を推進しながらも、性衝動の充足に関するリスクの縮減をねらいとする。青年にとっての読書と類似した危険に対して多くの教育学者と小説家が提案する戦略は似通っている。売春と、ポルノ的な小説と言われるものとのあいだで頻繁になされる比較に照らすと、書物は若年層にとって「大いなる先導

者」であるという旨のブールジェの観察が、はっきりとした意味を持つ。

1894年の論文で、ビュイソンは、青年育成におけるさまざまな種類の読書の役割を検討している。「背徳的」で「不道徳」なテクストを広める「二束三文の冊子」を弾劾した後、彼は次のように表明する。「徹底的に風紀を乱す文学による公共空間での毒物使用には、同じく平易で、同じく手っ取り早く、同じく魅力的で、同じく安価で、同じく多種多様で、同じく誰にでも手に取れる読み物で対抗するよう努めなければならない。いにしえの医学的格言が言うように、毒ヲモッテ毒ヲ制スだ。似たようなものには似たようなもので、出版物には出版物で［…］不健全な冊子にはまともな冊子で、戦わねばならない」（1894：22–23）。この教室外の読み物が持つ往々にしてわいせつな特性が、学校教育のカリキュラムとは真逆の教育を自国の児童におこなう危険があるため、この教育学者は、教室外の読み物には、準備を整えた行動を取るよう提案する。そうした読み物が若者たちを正しい道から逸脱させるのであれば、若者たちの注意を惹くよう同じくらい「魅力的」な他のテクストで相殺しなければならない。ビュイソンは作家や出版社に頼って、「低俗な出版物」に対し、それと同じくらい手に取りやすく同程度に楽しく、道徳的に立派な代替案を提案する。彼に言わせると、こうしたテクストであれば、「堕落して品位を落として」しまう手前で、早期に趣味趣向を育成するので、若い読者がポルノ的文学の安易な娯楽に熱狂するのを予防することができるだろう。こうして青年たちは、低俗なものの不健全な誘惑に対するワクチンを接種される。ビュイソンは、「教室外での生徒の自由な読書」が、「有用な読み物を手に取る習慣を身に着け、書物の趣味趣向を少しずつ吸収し、正しく美しい読み物を好んでくれるようにする」ために「可能なかぎりで、奨励され、指導され、チェックされる」よう提案している（1894：9, 13, 23）。そうすれば読書は、かならずしも社会を脅かすものではなくなるだろう。そそられるが道徳的に有害なテクストの煌びやかさに抵抗するために必要な慎み深い振る舞いをできるよう、若い読者が「趣味趣向」を発達させるためには、読書の実践が、奨励されつつも指導されなければならない。性病の災禍は管理売春の存在によって抑止できると、医療の当局者が主張するのとまったく同様に、青年による危険なテクストの「毒物摂取」は青年の読み物をチェックすることで食い止められると、教育学者は申し出る。どちらの場合も、国の監視は、若い男性の自己制御の欠如に対する窮余の策であるばかりか、「習慣」と「趣味趣向」を鍛えることで彼らが自己制御を学習できるよう促す手段であるとも見なされている。それゆえ国のチェックは、自己制御を一時的に代替するのみならず、自己制御の教育に努める。フルニエとビュイソンが主張する戦略――売春の監督と読書の「指導」――は言外に、売春や「不道徳」な文学を完全に根絶するのは不可能だと認めて、むしろ管理された状況を作り、そのなかで未来の市民が、健全な節度とともに肉体の娯楽と書物の娯楽のたしなみを学べるようにすることを提案している。文学を読んで評価する能力の発達は――社会規範に見合った（ヘテロ）セクシャリティの発達（Surkis, 2006）とまったく同様に――市民の理想として、さらには市民の完全な地位の条件として現れるので、そのため、ビュイソンにとってこの能力の発達は、国民教育のカリキュラムの目標でなければならない。「私たちが望むのは［…］我が国の若年層に文学的な雰囲気を作って、若年層を文明的な社交人たちの大きな会話サロンに少しずつ導き入れることだ」（1894, 23）。どちらの戦略も、快楽に逆らうのではなく、快楽を用いて市民の教育に用立て、節度があって世故に長けた趣味趣向を身に付けさせるのを狙いとする。管理された快楽は、過剰で常軌を逸した快楽に対するワクチン接種と捉えられる。ただしどちらの場合でも、同種の一方から他方へと、処方される治療薬から、人が恐れを口にする毒へと、横滑りする憂慮すべき可能性が残る。

情報と教育

文学者たちに対するビュイソンの呼びかけは、青年読者向けのおびただしい小説作品と時代を同じくしている（Prenot, 1998）。そういうわけでバレスは、二作目の小説『自由人』[4]（1889）の冒頭に「パリと地方にいるコレー

4)『自由人』（1889）、『蛮族の眼の下で』（1888）、「イデオロギー小説三作の検証」（1891）、『蛮族の眼の下で』（第二版、1892）、『自由人』（第二版、1904）、『根こそぎにされた人々』（1897）、「ルネ・ドゥミック氏への応答」（1900）といっ

ジュの生徒たちに」と献辞を付して、もう一度「私は子供と若者のみんなのために書いている」と念を押している（1994：97）。つまり本作は、若年層についての作品で、なおかつ若年層のための作品たらんとしている。バレスの前作――『蛮族の眼の下で』（1888）――の主人公フィリップが、ほとんど修道士さながらの隠遁生活から、「孤独を捨てる」決断をしてロレーヌとヴェネチアを旅行する行程を、一人称の語りがたどってゆく。それは、彼が信仰を再び見出す旅だった。冒頭の隠遁生活は読書の影響下に置かれている。〔ユイスマンスの小説〕『さかしま』を彷彿させる退廃と禁欲の入り混じった暮らしで、フィリップは、サント＝ブーヴやバンジャマン・コンスタンのような、自分にとっての「精神的仲介者たち」の作品についての長い「省察」に没頭する。本作は、書斎から教会へ、文芸愛好家によるこうした省察の「味気なさ」から「活動的な生活」へと至る道程をなぞっているが、「活動的な生活」の方は素描される程度で、物語の終盤でようやく、フィリップは「生活の規則」に我が身を捧げる（1994：121, 130, 175）。1889年の最初の序文で、バレスは、青年のあいだで自殺が多いことへのリアクションとして、この小説を提示している。「6、7歳くらいから自殺した子供たちの名前を、見つけて哀れに感じた。［…］もしこの子たちが私の作品を読んでいれば、これほど極端な解決策を取らなかったことだろう。繊細で怠惰なこの子たちは明らかに、きちんとした情報を得られていなかった」（1994：97）。生命力の欠如と情報不足との関係の性質は明示されていないが、自作が、片方を矯正することで、もう片方を修正する力を有していると、バレスは提案しているように見える。「イデオロギー小説三作の検証」（1891）という記事は、のちに『蛮族の眼の下で』の再版の序文になるのだが、この記事のなかでバレスが初期の自作を再訪するとき、「情報」という概念が再び登場する。「私は、若い知的フランス人の5、6年の学習期間のモノグラフィを試みた。［…］これらのモノグラフィは、ある一タイプのすでによく見かける若い男性に関する情報で、こうした男性はさらに増えるだろう。［…］拙著は

た、本稿で引用されるバレスのさまざまなテクストは、Barrès, 1994に集められ、再版されている。

［…］のちに資料として参照されるだろう」（1994：16–17；強調はバレス）。「モノグラフィ」や「資料」という用語が、超然とした観察者の仕事を示唆している一方で、バレスは、三作を通じて、自分が記述する状況に介入しようとしたことを明言して、こう続ける。「これらのモノグラフィは教育である」（強調はバレス）。この序論によれば、自我礼拝三部作[5]は、当時の若い男性を情報として表象するにとどまらず、若者をむしばむ害悪を正したいと願って、教育として、若者に向けられている。

気取った難解な文体で書かれた「内的生の小説」としての『蛮族の眼の下で』におけるニヒリストの文芸愛好から、それに続く二作での「行動」の礼拝に至る行程は、多くの点で、作者バレスの行程である。これらの作品が1892年とさらに1904年に重版された際に彼が書いたそれぞれの序文は、あとから自作に教育的な狙いを付与しようとする意志を示している。ブールジェは自作の『弟子』（1889）に付した序文で、「『自由人』には結論だけが欠けている」と非難しているのだが、1904年の〔バレスによる自作への〕序文は明確に、この非難への返答となっている。「たしかに『自由人』は、結論を出さずに研究を述べていたが、棚上げにしたこの結論は、『根こそぎにされた人々』［バレスが1897年に刊行した小説］で提示している。［…］私の思い違いでなければ、『自由人』を『根こそぎにされた人々』で補完すると、若者を簡単に不吉なニヒリズムへと追いやってしまったであろう確固たる素質を公益にそぐわせるという点で、若いフランス人にとって役立つ」（1994：94）。バレスは、近年の自作で明確にしていると主張して、初期自作の不明瞭さを擁護している。都合よく変節したと非難する批評家に答えて、彼は、1900年に出た同様の記事で、自作群の全体が、「矛盾ではなく一つの発達を提示している」「私のすべての真実の根幹には、常に実り豊かな私の誤りが［…］ある」と主張する（1994：179）。そういうわけで「発達」によって青年の素質を「公益」に役立てることに成功しているというまさにこの理由から、『自由人』は有益であるということになる。換言すれば、ニヒ

5）『蛮族の眼の下で』（1888）、『自由人』（1889）、『ベレニスの園』（1891）という三部作のことである。

リズムの傾向をもつ若者は、そこに自分を認めて、この小説を気に入る。この小説は、こうした自己認知の快楽として機能して、若者がニヒリズムを放棄するよう導くので、彼らのためになる。バレスが言外に認めているとおり、若者の抱える害悪を直接かつ明確に非難することで若い読者の注意を惹くのはむずかしそうだ。バレス自身もたどった文芸愛好から行動への行程に沿って若者を徐々に導く方がよい。したがって彼の小説は「誤り」の表象を、その数だけ呼び水として用いて、読者が自分の過ちを捨て、場合によっては、前もって見つけられている「真実」に至るよう導く。ビュイソンなら、毒ヲモッテ毒ヲ制スと言うところだろう。バレスの序文が押し付ける懐古的な視座によると、彼の小説は――梅毒に関するフルニエのパンフレットのように――ニヒリズムの危険に関する資料であるだけでなく、まさに教育であって、青年が――管理された娼館通いのように――規律に従って制限された仕方で自分が魅力に思えるものと接触しうるようにしつつ、絶望と自殺に行き着きかねない不節制から我が身を守る術を青年に教える。バレスの小説は、管理された想像空間となっていて、読者に文学的ニヒリズムを放棄するよう導きながらも、文学的ニヒリズムの魅力を味わうことを可能にしている。三部作として再編成されることで、青年を登場させ、青年に向けて書かれたバレスの小説は、読書に関する教育を提示して、これらの小説が過剰な文学性として表象するものを青年が退けるよう考案されている。

バレスが「イデオロギー小説三作の検証」をブールジェに捧げたときも、1902年の序文でブールジェに応答したときも、彼は、ただ友人に借りを返しているだけではない。その友人の記事のおかげもあって、彼は作家としてのキャリアを始めたのだが、時代を画した序文の作者を引き合いに出しているのだ。それこそが『弟子』の序文で、〔ブールジェ作の〕『弟子』が出版されたのは1889年、〔バレス作の〕『自由人』と同じ年だった。ブールジェの序文は直接、若いフランス人に向けられていて、小説そのものと同じく、思想的指導者たちの責任を懸念する問いに貫かれている。「我が国の若い男性よ、君は、自分が苦しんでいる問題の答えを、君の先輩である私たちの本のなかに探しに行くだろう。そうやって本のなかで出会う答えは、いくらかは君の精神生活次第、いくらかは君の心次第だ。そして君の精神生活は、フランスそのものの精神生活なのだ。[…] そういうことを考えると、たとえ二流三流であっても、誠実な文人なら責任に身震いしない者はいまい。[…] 君にこの文章を書いている友人は […] 心配しながら君のことを考えている」(2010：45)。道徳的かつ愛国的な義務をこうして表明しているにもかかわらず、ブールジェの小説には曖昧さがないわけではない。「こうした責任の研究」として、彼は、読者の行動と運命に対するある種の本がもたらす有害な影響をドラマチックに演出しつつも、反対に有益な影響を持ちうるようなテクストの事例を一つも挙げていない。この意味で『弟子』は「典型的な非建設的学習を描いた小説」である。本作でブールジェは、のちに『宿駅』(1904) でおこなうように、「建設的」[6] な学習という反例を提示していない。「誠実な文人」たらんとする者に対してブールジェが思い描く唯一の建設的な役割は、〔悪しき読書の否定という〕二重否定の部類に入る。つまりは、読書の危険について教訓的なテクストを書くことで、彼が打ち明ける懸念もそこに起因する。

ブールジェの序文は、ブールジェ自身を、教育家にして「友人」という二重の役割に位置づけている。親切な教育者であると同時に、それほど昔ではない時期に同じ境遇にいたことがあって、読者が直面している困難を理解できる卒業生として、彼は読者に語りかける。このように、この作者は、年齢と経験が道徳的権威を付与しているような、師のポジション――バレスが自分のそれぞれの序文で採用したポジション――と、青年読者との関係が近しさと同一化に基づいているような、仲間のポジションという二つの地位にまたがっている。アンドレ・ルベイは、自作の小説『初期の闘い』〔*Les Premières Luttes*〕――1897年に出版され、そのときこの作者は二十歳だった――の序文で、二つめのポジションを採用し、作家と読者の完全な対称性を表明している。「この小説の作者は若い男性で、本作を若い人たちに捧げる」。彼は、自作の主人公を、こうした置き換え可能で兄弟のような読者た

6) これは、『問題小説あるいはフィクション的権威』(1983) のなかでスーザン・ルービン・シュレイマンが提案した用語である。

ちの一群のなかに加えるに至る。「もし君が、私が推察するような人なら、もし君もまた君なりに、いくらかジャック・ダルヴェーズであるなら、ここにあるページをめくってみたまえ。遠くからになるが［…］握手しよう。君は私の兄弟だ。君は二十歳ではない。［…］君はたくさんの本を読んだことがある。君はいくらか生きて経験もしている。君はたくさんの試みをやって、しかも逡巡している」（1897：III-IV）。ルベイが二人称で素描する読者像は、かなりのところ主人公のジャックに当てはまる。したがって登場人物の描写は読者への診断となろう。序文に書かれた「君もまた」が示唆するように、作者は――彼もまた――主人公という鏡像のなかに自分を見出しているのだ。それゆえに三者は「兄弟」なのであって、虚構の登場人物が、読者と作者の鏡像的な紐帯の役割を果たしていることになる。ジャックの物語を叙述する書物をめくることは、作者の手を握ることに帰着する。ルベイは、彼の物語を叙述しているような一冊の書物の形を取る彼自身の欲望を、器用な手さばきによって、彼が書いた書物を読みたいという読者の欲望に転化するために、こうした同一化の連鎖を駆使している。そうするため、彼は三人称で「この小説の作者」に言及している。「いくらか注意を凝らして自分の周囲を見つめ始めたその日になってようやく、彼は孤独に苦しみ、迷いのさなかで自分を助けてくれる書物を渇望した。そうした書物が見つからなかったため、彼は、それをみずから書いて、自分が痛烈に味わった苦悩を［…］他の人たちが味わわなくて済むようにしようという野心を抱いた」（1897：III）。お察しのように、読者は作者と同じく、自分もまた一人ぼっちであることに苦しんでいるにちがいないので、ジャックの物語を通じて作者の物語を読むことで、この読者はみずからの物語と、自分に似た他の読者たちの物語を読み取るよう誘われ、こうして自分の孤独感情を断ち切り、苦悩を和らげるはずだ。しかし、読者が本当にジャックに倣うなら、ある種のアイロニーがここで言及を避けられている。というのもジャックの孤独は、ほんの若い時分から、読書に対する貪欲な情熱の仕業（しわざ）だということを、この小説がわりとすぐに教えてくれるからである。

『初期の闘い』は――書物愛好から「行動」への――教育的かつイデオロギー的な語りの行程をたどっているが、このモデルはバレスが小説三部作で確立したものである。自分にとって人生が不幸の連続で、想像のなかに逃げ込まねばならない憂鬱な読者の状態から、書物とその幻影に幻滅した行動的な人間の状態――「彼は今や、執着のない懐疑の笑みを浮かべて文学を眺めていた。終生、人生に駆り立てられ、行動して生きなければ、人生を生きられないと気づいていた」（1897：267）――へと、ジャックは移行する。物語の最後のページはバレスに敬意を表している一方で、ジャックは、新たに元気を取り戻し、イタリア沿岸の沖に向かって、まだ見ぬ有望な未来を目指して、ヨットで突き進む。「あらゆる面で自由人…」（1897：372）。バレスの三部作では、『自由人』と『ベレニスの園』の行動礼拝は、『蛮族の眼の下で』のニヒリスト的な文芸愛好から出て来るよう後から回顧的に導かれているにすぎないのだが、ルベイの小説はバレスの三部作以上に、目的論的な方法で構想されているように思われる。8年前に出版された『自由人』のおかげで、〔ルベイの〕小説における最後のページが成立しているため、明らかに、結論が先にあって、それに向けて語りの全体を決めているように見える。それゆえ、読者と登場人物と作者の兄弟的な同一化が序文に配置されているものの、それは修辞的な技巧であることがわかる。作者が自作の若い読者とすでに似ていたとしても、語りの終わりになると、まったく異なる見地から作者は姿を現す。結局のところ、作者が読者に提供する書物は――孤独で文芸を愛好し、本好きと――推定される読者の状態への慰めよりもむしろ、自作の登場人物の鏡像を通して作者が今や自分がそうである者、そうでありたいと願う者へと、つまり一人の「自由人」へと変わるための呼び水である。ここに新たな錯綜が生じている。ジャックは書き物のかすかな痕跡に見切りをつけて、「行動」の方を選択したが、作者自身は、『初期の闘い』を書いたがゆえに、「行動」を選択してはいなかった。大人になったジャックという登場人物はどの程度、作者に引き付けて捉えうるのか、この登場人物をむしろ行動的な男性性という理想の空想的な投影だと、どのくらい見なすべきなのかと、私たちは自問することができる。

したがって、ルベイの教養小説は問題小説で、教育的な狙いを持って、読

者による主人公や作者への同一化を駆使していることがわかる[7]。作者が、本作の想定される読者の憂鬱でニヒリストな精神状態に最初は声を与えるものの、それは読者を真逆の方向に誘導するためにすぎない。作者は、共感をうわべで装って介入するわけだが、それも作者の教育的（ペダゴジー）な、さらにはデマゴギー的なメッセージをいっそううまく伝えるためなのだ。バレスは、『自由人』初版の献辞で、同じようなことを述べている。「私の愛するリセの生徒たちに貢献することをもっぱら気づかって、日記という、考えうるかぎりもっとも子ども向けの形式にとどめた」（1994：98）。青春期のニヒリズムについての表象が、若い読者のために用立てられている。治療薬は、この子たちには飲みやすくなっただけだろう。毒ヲモッテ毒ヲ制ス。しかしながら重大な逆説（パラドクス）が残っている。ルベイの事例が示すように、読書が若年層を苦しめる害悪の大元にあるのなら、小説は本当にその害悪から若年層を治癒することができるのだろうか。

毒と治療薬

『現代心理論集』（1885）の第二シリーズ巻頭言で、ブールジェは「現代の若年層の［…］危機」を総括する。「若年層には、もっとも深刻な時期に達した精神生活の病の症候が見られる」と彼は書いている。この病は先行世代の遺産で、「強力な感染手段」と見なされる特定の文学によって散種されたようだ。医学的な隠喩はコメント全体に用いられている。この作家は、「感染」がどこで止まるのかと自問して、みずから『論集』のなかで「憂鬱の芽」の分離抽出を試みたのだと説明している（1993：437–440）。これより4年後に刊行された『弟子』のなかで、ブールジェはやはり医学的な隠喩を用いており、登場人物の一人に、「文学中毒の一般法則」を省察させている（2010：222）。読書と毒性の連想が語りの全体に見られ、主人公が若い女性に本を貸し与えたことで、彼がこの女性に毒を盛ったと非難されると

7）シュレイマンにとって“問題を提起する”学習物語の説得的な効果は、読者と主人公との潜在的な同一化を経由する」（1983：92）。読者と作者との同一化はこの効果を強化しうるにすぎない。

き、まさに文字通りの意味が付与されているのがうかがえる。バレスは、『根こそぎにされた人々』で、高尚な形で同じトピックを用いているが、それはとりわけ、哲学の授業で「ドイツ思想家の人脈によって選別された、あの遠きオリエントからの死の香り」にさらされたフランソワ・スチュレルという登場人物がこうむる有害な影響の描写に見られる。バレスの説明によると、それらの「憂鬱な蒸気」が「全面的凝縮」として、にわかに沈殿するのは、フランソワが、蠱惑的で裕福なアルメニア人女性アスティネ・アラヴィアンと出会って、彼女のエキゾチックな物語に魅了されるときである。アスティネの言説はそれ自体が隠喩の混合によって描写されていて、そこにはオリエンタリズム的な紋切り型と軍事的・医学的・化学的な語彙とが入り混じっている。それは同時に「アジアの高ぶらせる侵入」であり、ごく少量の「毒性の粉塵」であり、「毒の一撃」であり、「死の沈殿物」である。フランソワの誘惑の場面を締めくくる文章は、こうしたすべてのイメージを、含みの多い二重の隠喩に凝縮している。「アスティネは、彼がひもとくすばらしい書物だ。彼は、彼女の言葉を貪欲に求めて、毒をあおる」（1994：500, 553–555）。書物は、ここまで隠喩のたとえられる側――毒としての書物――だったが、突如として――書物としての女、という風に――隠喩のたとえる側となる。アスティネは、擬人化された読書の毒性にほかならない。二人の「根こそぎにされた人々」による彼女の暴力的な殺害が、小説のもっと後に出て来るが、これは単なる物語上の急展開とは別の何かとして現れる。すなわちそれは、読書の犠牲者たちにとっての象徴的な復讐の遂行なのである。

プラトンは、『国家』において、演劇に没頭する若い男性たちを、毒物を食む獣になぞらえていたが（X, 595a）、このプラトン以来の反ミメーシス的な言説のなかには、毒と中毒の隠喩が一貫して見受けられる。見世物に反対した教父たちの著述において繰り返されてきたが、これらの隠喩はフランスで17世紀の演劇に関する論争のなかに再登場し、そこでは古代人の権威がしばしば言及されている。かくしてジャンセニストのピエール・ニコルは、1665年の『想像上の異端についての書簡』で、「小説を作る者たち」と「演

劇を書く詩人たち」を同時に「公共空間での毒物使用者」として告発している（in May, 1963：24）。シルヴィアーヌ・レオーニが指摘するとおり、堕落させる力として模倣を非難するこうしたプラトン的モデルは、古代のテクストの西洋的遺産のなかで、アリストテレス的モデルと共存していて、こちらのモデルによると、ある種の危険の詩的かつ演劇的な表象が、「純化」された状態では、「劣化ではなく完成という観念」（1998：3–4）を指すカタルシスの望ましい経験に帰着しうるとされる。19世紀末に青年たちに向けられた作家たちの治療戦略は、こうした二つのモデルの執拗な影響と、両者のちぐはぐで往々にして矛盾した共存とを反映している。同時代の若年層を病気にする「文学中毒」を告発することで、ブールジェとバレスのような小説家は、フイエのような注釈者と同様、穏健なプラトン的ポジションと呼ぶにふさわしい立場を採用している[8]。逆に、みずから小説創作を選択することで、これらの作家たちは、カタルシスというアリストテレス的モデルへの信念を、つまり非建設的な事例の管理された表象がその読者たちの道徳的な矯正に寄与しうる可能性への信念を、示している。ジョゼフ・ユドーのように、『ジャン・チュロワの成長』（1911）への序文のなかで、「自分の治療薬を喧伝する医者」に自身をなぞらえて、彼の小説の教訓を受け入れるなら「あなたはまっとうな大人に戻れる」（1911：vii）と保証するにせよ、ブールジェのように、『弟子』で、まずもって知性偏重の被害を「示」そうと模索し、そうして自作に「効き目がある」（2010：53, 56）と明らかになるのを願うほかないにせよ、これらの作家たちは、自作の小説が、同時代の若者たちのもとで猛威を振るう「精神生活の病」への治療薬として役立ちうることを主張している。

重版のたびに序文を書いて、自我礼拝三部作を単なる「情報」の地位から体によい「教育」の地位へと移行させたバレスと同様に、ブールジェは三度、『現代心理論集』の序文を書いて、この作品は診断的な中立性から明確な教育的性格へと変わった。1883年の巻頭言は、象徴的な読者の青年を登場させ、

8）注目すべきは、フイエがプラトンに関する2巻本の研究の作者であることだ。参考文献のFouillée（1869）を参照せよ。

「私たちの時代の一定数の作家が、若者たちに模倣するよう提案している感情の見本のいくつかを規定する」にとどめることを明言している。1885年の『論集』第二シリーズの序文は、すでに見たとおり、医学的な語彙を並べている。彼は、1883年の『論集』に対する反応にある種の違和感もまた表明している。「あなたがあれほどいい気になって描写している病に対して、あなたは治療薬を提供しているのか？」とブールジェは書いて、自分への批判を敷衍している。「控えめに打ち明けると、私はいかなる可能な結論も提示できない」というのが、彼の唯一の返答である。こうした留保とはまったく反対なのが、1899年に書かれた三つめの序文で、こちらははっきりと処方箋のような形を取っている。「現代のフランスの精神的な病に関して［…］現在のところキリスト教が治癒の唯一で必要な条件だ」（1993：436, 440, 442）。間をおいて、ブールジェは――1894年、彼が42歳の時――アカデミー・フランセーズの会員に選出され、青春期に放棄していたカトリシズムへと立ち戻った。1899年の『論集』重版は、彼の信仰回帰の公的な告知に対応しており、そこには複数の補遺が収められているが、なかでもアカデミー・フランセーズ会員就任演説には、これを機に「意志の病：治癒」という意義深いタイトルが付与されている（1993：417–427）。導入的な注記には、この補遺を追加した目的がはっきりと示されている。「私が今日この『論集』の最後に差し出すのはこの補遺で、それは『論集』の結論の役割を果たしうる」。したがって、それまでの十年の『論集』では中断されていた問いへの回答が、つまり同時代の文学的な病に対する治療薬に関する長い記述が、ここでついに現れる。

慣例でそう求められているように、ブールジェの演説はアカデミーの前任会員の賛辞となっている。彼の前任会員は、フロベールの長年の友人であった作家マキシム・デュ・カンだ。ブールジェが綴ったデュ・カンの青年期の物語が注目すべきなのは、そこで彼が、『論集』や『弟子』に見られるような、青年たちの過剰で有害な読書に関する言説のあらゆる決まり文句を並べている点である。若きデュ・カンは、後任会員の彼の目には、19世紀末の精神的病の先駆的な症例であることが明らかとなる。ブールジェは、デュ・

カンの描写から始めるが、デュ・カンは子供の頃、「同時代の詩人たちの最新刊を［…］こっそり読んでいて」、それらに触れたことで、ロマン主義のそれであるような複雑で危険な理想を、いやというほど抱え込んでいた」。青春期に、デュ・カンとフロベールは、山ほど本を読んで、二人とも「その年齢で陥る最悪の苦悩によって［…］同じ不均衡の犠牲者」となっていた。大人になってデュ・カンは数冊の詩集を、次にいくつかの小説を出版したが、そのうちでブールジェが選んで引き合いに出すのは、『ある自殺者の回想』（1855）と『失われた力』（1867）で、いかにも病状の様相を呈した二作だった。デュ・カンは、ブールジェが描く肖像では、人生の半ばまで病人、「憂鬱な人」、「教養で培ったロマン主義」の犠牲者で、そのことによって彼は、精神的に二流な存在として、「文学だけを夢見」ているがゆえに創造的な生活を送ることができなかった。もっとも、彼が賞賛に値する人であるのは、この失調した青春期のためではなく、むしろ彼の奇跡的な治癒のためである。それについて、新たなアカデミー会員であるブールジェは、デュ・カンの『文学的回想』（1882–1883）のあるエピソードから取られたドラマチックな物語を紡いでいる。40歳まで「私は飽くことなく本を読めた」とデュ・カンは書いている。しかし1862年5月、両目の痛みのため眼鏡屋（オプティシャン）に相談したところ、眼鏡をかけるよう勧められた。「寄る年波が私を襲っていた。私は眼鏡屋の言うことを快く受け入れられなかった。それでも私は従った。鼻眼鏡を発注した」（強調はブールジェ）。ブールジェはこの表現に核心的な重要性を置く。「紳士のみなさん、私は従ったというこの語に、そしてこの語がどういう口調で発音されたのかにご注目いただきたい。［…］この作家がこの語を差し向けたのは寄る年波に対してだけではないことをよくご理解いただきたい。人生全体に対して、現実に対して、社会共同体に対してであって、これから彼はその有用な成員に、有益な担い手になるだろう」。逸話はさらに続く。眼鏡屋がレンズを用意するあいだ、デュ・カンは外に出てパリをぶらついたが、そこで彼は急にある着想を得る。もし自分が首都パリについての記念碑的な著作を書いたなら？　しかも小説ではなく、来たるべき世代にとって掛け値なしの歴史資料となるような、入念に細をうがった膨大なルポ

ルタージュを書いたなら？　ここでは物の見え方（オプティック）が象徴的な価値を持っている。若きデュ・カンは、両眼を、飽くことなく読書するのに用いて、本当の意味で街を見ることなく街で暮らしていた。大人になったデュ・カンは逆に、老眼で読書が困難になって、そのとき初めて自分を取り巻くものが「見える」。こうした着想の公現の日に彼が構想した計画は、やがて『パリ、その器官、機能、生（1869–1875）』という六巻からなる一つの著作となる。「モノグラフィ」というドキュメンタリー的ジャンルの小説のこうした一節を、ブールジェは、病的な文芸愛好家から男らしい労働者への根本的な変容として記述する。「世紀の申し子は、むなしい情熱と不毛な憂鬱とロマン派的な冒険にうんざりして、頑健な者に、勇ましい筆の担い手に変容し、この者にとっては、それ以来、彼が向き合うのは、唯一の広大で男性的で市民的な作品のみとなろう」。ブールジェ自身の記述によると、こうした変貌から現れる作家像は男性性の模範であり、働く男性性の理想の投影であるが、これがなおさら驚くべきなのは、その変容の条件がフィクション――この演説をおこなうときにブールジェがもっとも有名になっていたジャンル[9]――の放棄だからである。新しいアカデミー会員のブールジェは、前任者を引用しながらこの点を力説する。「詩句と小説の不明瞭な思い付きの代わりに、自分の支えとなる丈夫なものに私はつかまる」。モノグラフィは、文学的表象のポテンシャルと世界の真理とを和解させるがゆえに、社会にとって有益だというのが、ブールジェの結論である。彼は、この手堅いジャンルにとってスローガンとして役に立ちうるフェヌロンの格言を引用する。「言葉を思考のためだけに用い、思考を真理のためだけに用いること」。この修辞的な操作は、ことばと真理との等式にほかならない。この反プラトン的なファンタスムにおいて、作家ブールジェは、ミメーシスと真理とを分かつ裂け目を埋めて、「男性的」で社会的に有用な十全たる現前のエクリチュールを生み出すに至る。ブールジェが強調するように、しかしながら、こうした勝利は、読書による、若者らしい想像物と青年期の感傷癖とを破棄したことの代償、そ

9) 1894年の時点で、ブールジェは7作の小説と3作の短編小説集の著者だった。

の代わりに客観的な現実に従ったことの代償なのだ。「もしデュ・カンが、彼が従事していた［…］膨大な調査に、背景やロマン派的な登場人物を用いて生命を吹き込んでいたなら、彼はまたもや自分自身のうちで、眠らせておくべき想像と感性の力を勢いづけていたことだろう。自分を治癒してくれる対象への絶対的な従属を実践しなかったことだろう」。したがって、ここにこそ、ブールジェにとって、文学中毒に対する治療薬がある。小説的なものを放棄して、現実に従うこと。彼はデュ・カンを引用する。「私は真理によってみずからを律してきた」（強調はブールジェ）。

文学の放棄は、ジョセフ・ユドーの二冊の小説のなかでドラマチックに演出されている。『ジャン・チュロワの成長』（1911）のなかで――その序文がブールジェを参照して、「我が国の若い男性」に呼びかけている――、主人公は第一に、ソルボンヌ大学の図書館で日中を過ごして、作家になる夢を抱いた大学生として提示されている。失恋の後、彼はパリを去り、生まれ故郷のボースに居を構えたが、そこで、全面的に手仕事に従事して、彼は、文学的教養を否定するに至る。「彼は、働いている間、抱えていたモヤモヤを忘れて、幸福だった。［…］ほかのことはすべて忘れたのだ。彼はもう、無意味で架空のことで苦しむこともない」（1911：244–245）。ユドーの二作目の小説、『書物のバビリオン』（1914）は、同じテーマを再び取り上げているが、用いられている筋は、主人公のロベールが、自由思想家であった祖父から受け継いだ図書館をめぐって展開する。光明のような作家たち――スタンダール、ルナン、ヴォルテールなど――の危険な内容が、若い主人公夫婦に襲いかかる、あらゆる不幸の原因として絶えず記述されている。ロベールは無気力で不幸な「文芸愛好家」となる。妻はドンファン的な友人男性に誘惑される。息子たちの一人は、ひよわで年端の行かないうちに亡くなる。物語は、浄化のための破棄によって終わりを告げる。ロベールは書斎を、革命前のチャペルの状態に戻すことを誓って、図書館が焚書へと葬るすべてを弾劾する。「暖炉で途方に暮れた目をして、彼はかつて自分が魅了されていたフィクション作品たちが消えてゆくのを見つめていた。彼には、炎の翼に乗って、この作品たちが、世間知らずで貪欲な人々の心に、不信仰と幻滅の

種をまき散らしに行くように思われた」（Hudalt, 1914：246）。『書物のバビリオン』では、文学的手段によってなされる文学に対する燃えるような告発が有する逆説が、耐えがたいまでに剝き出しにされている。不貞な誘惑の小説的な紋切り型を活用した一作の小説はいかにして、『赤と黒』を大真面目に焚書にすることができるというのだろうか。その答えは、破棄の暴力を経由する。アスティネという書物としての登場人物と、無数の魅力の詰まった図書館は、アスティネの場合は殺戮によって、ロベールの場合は火によってなされたように、その破壊の代償をともなうことなくして、それらを堪能することはできない。ブールジェから見たデュ・カンと同じく、ユドーの登場人物たちが文学に対する若者しい情熱への権利を手にするための条件は、いったん大人になったら、これらの放棄によって、その情熱から癒えることなのである。この者たちが理想化された生産的な男性性に到達しうるのは、ブールジェが「伝統と土地特有」の力と呼ぶものにこの者たちが服従するという代償を支払った場合にかぎられる。ユドー自身が、知性偏重の先回りをして、ユドーの思想的指導者バレスが推奨する、こうした「行動」の賞賛をやがて実践することになる。彼は1915年、ロレーヌの闘いで戦死する[10]。

結論

読書危険論は、それまでの諸世紀から継承され、19世紀を通じて受け継がれ、20世紀への転換期に、新たな息吹を見出すが、それは、印刷物と文学の社会的威光がその絶頂にあった時代である。私たちがすでに見たように、エッセイストと教育学者らが、青年たちの読書欲を確認して、こうした欲望を分別と節度の学習に役立てる指導戦略を提案している。大勢の作家はと言えば、「文学中毒」の危険に対する警告であると同時に甘みを加えた代替物であるような、二重の役割を果たす小説を、若い読者たちに提示している。

10）『1914–1918年戦没作家アンソロジー』は、バレスの賛辞を引用しているが、彼にとって、ユドーのそれぞれの小説は「まったく当然ながら［…］『弟子』と同じく［…］小説的なものから私たちを治癒せんと望んだ小説本たちの系列に位置づけられる」（Association, 1924：t. I, 361–367）。

しかし、小説的なものに横滑りしがちなフィクション作品たちと、若い読者たちを小説的なものから連れ出そうとする教育的性格を持つそれぞれの序文たちとのあいだに、こうした小説的なものと序文とのあいだに頻繁に見られる一貫性の欠如によって、矛盾が浮き彫りになった。

若いフランス人男性たちの読書の習慣と選好を懸念する総括は、1939–1945年の戦争まで続くことになるが、そう遠くない時期に、新たなメディア——映画、テレビ、インターネット——への彼らの欲望が、読書を、もはや危険性がなく、むしろほとんどつねに望ましく有益な実践の地位に追いやることになる。まさにそのとき、まったく別の言説が定着する。読書で病んだ青年たちを長らく心配したあと、人々はついに「もう若者はあまり本を読まない」と嘆き始めるのだ。

参考文献

Association des écrivains combattants.1924. *Anthologie des écrivains morts à la guerre 1914–1918*. Amiens : Malfère.

Barrès (Maurice). 1994. *Romans et Voyages*, t. I. Paris : Robert Laffont. (Bouquins.) [Édition établie par Vital Rambaud.]

Bourget (Paul). 1904. *L'Étape*. Paris : PlonNourrit. [Publication originale.]

Bourget (Paul). 1993. *Essais de psychologie contemporaine*. Édition établie par André Guyaux. Paris : Gallimard. [1re et 2e publication 1883, 1885.]

Bourget (Paul). 2010. *Le Disciple*. Édition établie par Antoine Compagnon. Paris : Librairie générale française. (Livre de Poche.) [1re publication 1889.]

Buisson (Ferdinand). 1894. « La lecture en classe, à l'étude, et dans la famille ». *La Revue pédagogique*, 1er juillet, pp. 4–23.

Dean (Carolyn J.). 2000. *The Frail Social Body : Pornography, Homosexuality, and Other Fantasies in Interwar France*. Berkeley : California University Press.

Deschamps (Gaston). 1899. *Le Malaise de la démocratie*. Paris : Armand Colin.

Du Camp (Maxime). 1855. *Mémoire d'un suicidé*. Paris : Librairie nouvelle. [Publication originale.]

Du Camp (Maxime). 1867. *Forces perdues*. Paris : Michel Lévy. [Publication originale.]

Du Camp (Maxime). 1869–1875. *Paris, ses organes, ses fonctions, sa vie*. Paris : Hachette. [Publication originale.]

Du Camp (Maxime). 1882–1883. *Souvenir littéraire*. Paris : Hachette. [Publication originale.]

Fouillée (Alfred). 1869. *La Philosophie de Platon : Exposition, histoire et critique de la théorie des idées*. Paris : Ladrange. [Publication originale.]

Fouillée (Alfred). 1897. « Les jeunes criminels, l'école et la presse ». *La Revue des Deux Mondes*, 15 janvier, pp. 417–449.

Harsin (Jill). 1985. *Policing Prostitution in Nineteenth-Century Paris*. Princeton : Princeton University Press.

Hudault (Joseph). 1911. *La Formation de Jean Turoit*. Paris : Perrin.

Hudault (Joseph). 1914. *Le Pavillon aux livres*. Paris : Perrin.

Lebey (André). 1897. *Les Premières Luttes*. Paris : Fasquelle.

Léoni (Sylviane). 1998. *Le Poison et le remède : Théâtre, morale et rhétorique en France et en Italie, 1694–1758*. Oxford : Éd. Voltaire Foundation.

Lyons (Martyn). 2001. *Readers and Society in Nineteenth-Century France : Workers, Women, Peasants*. *Hampshire* : Palgrave.

May (Georges). 1963. *Le Dilemme du roman au XVIIIe siècle : étude sur les rapports du roman et de la critique (1715–1761)*. Paris : Presses universitaires de France.

Pécaut (Félix). 1894. « Notes d'inspection ». *La Revue pédagogique*, 15 octobre, pp. 289–319.

Pernot (Denis). 1998. *Le Roman de socialisation, 1889–1914*. Paris : Presses universitaires de France.

Suleiman (Susan Rubin). 1983. *Le Roman à thèse ou l'Autorité fictive*. Paris : Presses universitaires de France.

Surkis (Judith). 2006. *Sexing the Citizen : Morality and Masculinity in France, 1870–1920*. Ithaca : Cornell University Press.

Swart (Koenraad). 1964. *The Sense of Decadence in Nineteenth Century France*. La Haye : Martinus Nijhoff.

Tarde (Gabriel). 1897. « La jeunesse criminelle : Lettre à M. Buisson ». *Archives d'anthropologie criminelle, de criminologie et de psychologie normale et pathologique*, 12, pp. 452–472.

訳者あとがき

本稿は、PROULX (François), « « De nouveaux et étranges éducateurs » : dangers de la lecture et remèdes littéraires, 1883–1914 », *Culture & Musées* 17, 2011, pp. 21–40 の翻訳である。フランソワ・プルーは、イリノイ大学の准教授で、『プルーストと諸芸術』(2015) と題した著作を出版しているが、査読論文である本稿は、その後、大幅に加筆されて、2019 年に『書物の犠牲者たち』と題された 3 部構成の研究書として出版されている[11)]。

本稿の翻訳作業は、訳者の科研費研究課題「ステファヌ・マラルメと 19 世紀末フランスの読書有害論」(19K13141) の一環である。

マラルメは、一般向けに紹介される際、〈文学の問い〉の主導者として、「二十世紀のクリティックや文学についての根源的な問いを主導してきた詩人の一人」として位置づけられることがある[12)]。それはまちがっていないのだが、訳者は、マラルメとその周辺の作家の研究者として、学識ゆたかな批評家でも、時代や社会を代表する国民作家でもなく、むしろ自覚的に傍流に身を構えていた彼が、どうしてそのような問いを真正面から問う必要があったのか、そちらの方に関心が向く。

訳者が重要だと考えるのは、19 世紀末の出版状況である。世紀を通じて出版文化が次第に活況を呈してゆく。こうした情報化社会の到来によって、

11) PROULX (François), *Victims of the Book: Reading and Masculinity in Fin-de-Siècle France*, University of Toronto Press, 2019. 序論で方法論が述べられたあと、第 1 部では、世紀末の若者の置かれた状況が詳述され、第 2 部では、作家たちによる若者の診断として、ブールジェとバレス以外に、ジュール・ヴァレスが新たに加わって、三者の主張が紹介されている。第 3 部では、作家たちによる処方箋として、マルタン・デュ・ガール、ジッド、プルーストが取り上げられている。本書の書評については例えば、次を参照にせよ。PRIEST (Robert), « François Proulx, *Victims of the Book: Reading and Masculinity in Fin-de-Siècle France*. Toronto, Buffalo, N.Y., and London: University of Toronto Press, 2019. vi + 390 pp. », *H-France Review* Vol. 21, No. 75., May 2021. https://h-france.net/vol21reviews/vol21no75Priest.pdf

12) 菅野昭正、石田英敬「対談 マラルメという「世紀」の問い」、『現代詩手帖』42 (5)、pp. 10–11、1999 年 (「特集　マラルメ 2001」).

教会や地域の影響力が相対的に減退し、出版物の影響力が強くなる。例えば、一定数の若者が、人間の情緒面を、その病的な発露も含めて掘り下げたロマン派以降のさまざまな作品に耽溺し、自分の愛読書の書き手が現役の場合は、実際に会いに行って個人的な師弟関係を結ぶような傾向も見られた[13)]。象徴主義の運動はそうした複合的な現象の帰結でもある。一方でそれは、ボードレール、ランボー、ヴェルレーヌ、マラルメといった詩人たちに心酔した青年たちが、現役の後者二人のうちマラルメのもとに通うようになった中で生まれたのが象徴主義とされる存在である。他方で、その象徴主義を一躍世に知らしめた 1886 年のジャン・モレアスによる「宣言」の登場は、1881 年の出版自由法の制定以降、さまざまな小雑誌が生まれ、文学宣言もまた数多く生み出されてきたことと密接に関係している一方で[14)]、文壇における象徴主義のプレゼンスが注目を集めた 1890 年代のジュール・ユレによる「文学の進化について」のアンケートもまた、ジャーナリズムの所産であった。

しかし同時に、ユレのアンケートが示すのは、保守派の作家たちによって、このような象徴主義の台頭が危険視されていた事実である。この者たちにとって象徴主義は、道徳的には退廃であり、カトリシズムや地域に根差した伝統文化を脅かすメディア現象であり、またそれゆえにグローバルかつインターナショナルで、場合によってはゲルマン的で、とにかく反フランス的なものであった。このような立場の代表格が、ポール・ブールジェだろう。フロベールとの関連にも触れながら、ブールジェの『現代心理論集』や『弟子』のような著作が与えた影響や彼自身のその後のキャリア[15)]については、

13) 国内の研究では、熊谷謙介「マラルメと師弟のまじわり」、『人文学研究所報』57、2017 年、pp. 1–18.

14) ILLUZ (Nicolas), « Les manifestes symbolistes », *Littérature* 139(3) , 2005, pp. 93–113.

15) 日本では、著名な学者によって書かれた次の 2 本以外にも、とりわけバレスの方は政治家としての側面の研究も含めるとそれなりに数はあるが、ブールジェ学者、バレス学者と呼ばれる研究者の層はまだまだ薄いと言わざるを得ない。今回の論文翻訳はその遺漏を埋める作業の一端である。

— 田中琢三「ブールジェ『弟子』と 19 世紀末「問題小説」における師弟関

今回の翻訳論文がたくみに論じている（ちなみに論文では触れられていないがブールジェは、マラルメ論の執筆も検討していた[16]）。もっとも、同論文が示唆するように、ブールジェらの言説はフランスの保守派のイデオロギーにとどまるものではなく[17]、1890年代になると、有害図書が青少年のもたらす悪影響に対する懸念という点で、フェルディナン・ビュイソンとガブリエル・タルドのやりとりに見られるように、教育や社会学に関わる共和派の政府高官にも共有されていたことがうかがえよう[18]。

マラルメの言説をこうした時代的文脈に置いてみると、見えてくることがいくつかある。第一に、彼を慕う若者たちに出会ったことで、教師を生業と

係」、『お茶の水女子大学人文科学研究』9、2013、pp. 37–46.

— 有田英也「「成人」という課題：1920年代のモーリス・バレス受容をめぐって」、『仏語仏文学研究』4、東京大学仏語仏文学研究会、1990、pp. 63–78.

16）この点については、アンドレ・ギュイヨーがブールジェの『現代心理論集』を編纂した、翻訳論文の参考文献リストに挙げられている Bourget (1993) に収められたギュイヨーの序文を参照。

17）英国でも似たような現象が確認されている。ZIEGER (Susan), « Holmes's Pipe, Tobacco Papers and the Nineteenth-century Origins of Media Addiction », *Journal of Victorian Culture*, Volume 19, Issue 1, 2014, pp. 24–42. この論考では、英国のホームズシリーズの受容の文脈と、タバコのような薬物依存と、ブールジェが非難したようなプリントメディアへのアディクション（行動嗜癖）とが、19世紀末以降、密接に関わり合った「中毒」として描かれている。もちろんマラルメは葉巻を吸うマネの肖像画で有名であるのみならず、その生活の点でも詩学の点でも、タバコや酒といった薬物が、無視できない位置を占めている。訳者はその一端をすでに論文として発表している。Cf. 立花史「《挨拶》について——マラルメ後期状況詩の和訳と注解」、『日吉紀要 フランス語フランス文学』73、2021、pp. 45–63.

18）とはいえ、本論文を読まれた方は、ブールジェが健全な大人像を語るときにじみ出る鼻持ちならない「有害な男らしさ」に辟易されることだろう。訳者は、もう一つの科研費研究課題「移民作家のフランス象徴主義——マラルメからジャン・モレアスへ——」（22K00468）で、モレアスとその周辺の論客を俎上に載せて、象徴主義のホモソーシャルな空間にも目を配りつつ、世紀末の保守派のこうした側面を分析し始めている。

しながらその仕事内容にうんざりしていた彼が、学校とは別の意味で、もっと水平に近い関係性のなかで、ある種の教育を、先輩から後輩への（あるいは逆向きの作用も含めた）情報伝達や遺産継承を考えるようになっていることであり、そこから、文学や読むこと一般についての彼なりの定式化が生まれている。第二に、彼もまた、新聞や雑誌のようなジャーナリズムに対して批判的である。しかもジャーナリズムとともに、感情移入に誘い込む小説という文学ジャンルに対する批判がそこに重ねられており、新聞や雑誌の饒舌さとも同一化装置としての小説とも一線を画したところに、彼の考える詩作が位置づけられている[19]。このような意味で、マラルメもまた、今回の論文が論じているような「読書の危険」に警鐘を鳴らす言説に、一定程度、与していることがわかる。ただしブールジェやバレスと違って、マラルメは、小説とは別の読み方を求める彼の詩をもって「読書の危険」に臨んでいる。毒ヲ以ッテ毒ヲ制スが、『イジチュール』を書いて自分の精神失調を治そうとしていた若きマラルメが用いた言葉でもあることは、はたして単なる偶然の符合だろうか。マラルメの詩学のなかに、ブールジェやバレスと問題意識を共有しながらも、「読書の危険」に対する別の処方箋としての側面を浮き彫りにすること[20]、したがってマラルメの提起する〈文学の問い〉とは、大文字の文学一般に関する問いというより、主流の文学に抗う傍流の文学の問いであった可能性を吟味すること、また、その一環で、今回の論文翻訳に見ら

19）「読書の危険」をめぐるマラルメの主張が読み取れるのは、« Étalages » で、「陳列」という邦題で呼ばれる短い評論なのだが、雑誌掲載の後、技巧を凝らした散文集『ディヴァガシオン』に収められた。Cf. MALLARMÉ (Stéphane), *Œuvres Complètes II*, rédigées par Bertrand Marchal, Gallimard, 2003, pp. 218–223.（ステファヌ・マラルメ「陳列」、『マラルメ全集Ⅱ　ディヴァガシオン他』、pp. 253–262.）

20）訳者は、その成果を何度か発表済みである。

— 立花史「詩句に流れる時間の遊び——マラルメ作品を初めて読むために」、マラルメ・シンポジウム、ステファヌ・マラルメ没後120周年記念「基調講演」於慶應義塾大学日吉キャンパス、2018年9月8日.

— 立花史「マラルメにとっての文学と人生」、日本フランス語フランス文学会春季大会ワークショップ「文学と人生」於成城大学、2019年5月26日.

れるように、「読書の危険」をめぐる19世紀末の議論を、論文や翻訳その他の活動を通じて周知すること、以上が訳者の研究課題「ステファヌ・マラルメと19世紀末フランスの読書有害論」である。

ところで、翻訳論文の射程は、こうした文学研究にとどまるものではない。一方で、それは、私たちが特定のメディアに依存する現象に対する問題提起ともなっている。そのメディアの種類は、論文でも触れられているように、文学から映画へ、テレビへ、ゲームへ、インターネットへ、スマホへと拡張され、論争化される対象がそのつど移動してゆく[21]。新しいメディアに対する保守的な警戒心に尽きるものではなく、ここには、マルチメディア環境のなかで、健康を害するほどのアディクションに陥ることなく、いかに快適に暮らしてゆくかという、きわめて今日的な問いがひそんでいる。その一方で、それぞれの形態のメディアが、そこで表現されるフィクションの点においては、人間に有害な影響を与えると一概に言えるものなのかどうかというミメーシスの問いにもつながっている。この点は、とりわけフランスでは、ジャン＝マリー・シェフェールの哲学的なフィクション論[22]として、その次にそれを受けたフランソワーズ・ラヴォカによるフィクション論の学際的な総括[23]として、さらにはラヴォカが推進するフィクション・フィクショナリティ研究国際学会の活動として、現在も展開されている。とはいえ、訳者は、シェフェールのフィクション論とそれを受けたラヴォカの総括が、あまりに“小説的”であることを危惧して、マラルメの言説とその作品を通じて、文学フィクションもまた一枚岩ではなく、多様な様態を持ちうることをあらためて強調する研究発表をおこなっているが[24]、それもまた、訳者の同課題に

21）近年では、スウェーデンの精神科医が書いた『スマホ脳』が大いに話題になった。アンデシュ・ハンセン『スマホ脳』、新潮新書、2020年.

22）SCHAEFFER (Jean-Marie), *Pourquoi la fiction ?*, Seuil, 1999.（ジャン＝マリー・シェフェール『なぜフィクションか？——ごっこ遊びからバーチャルリアリティまで』（久保昭博訳）、慶應義塾大学出版会、2019年）

23）LAVOCAT (Françoise), *Fait et Fiction : pour une frontière*, Seuil, 2016.

24）この点については日本語とフランス語で内容の一部が重複する二種類のものを発表している。

則した研究の一端であることを書き添えておく。

思えば、訳者が、ステファヌ・マラルメとその周辺の作家の研究を始めてから、最初にブールジェの名を同業者から聞いたのは、留学中に受講していたベルトラン・マルシャルの講義だったと思う。「今はすっかり読まれていないけれど……」と断った上で、あるとき彼が、19世紀末におけるブールジェの重要性を熱弁し始めたのがたいへん印象に残っており、それが訳者においては今回の研究として結実しつつあると言ってよい。その意味で、訳者のこの科研費研究は、マルシャルの思い出に捧げられたものである。

— 立花史「哲学的フィクション論を用いた文学研究：ジャン＝マリー・シェフェール、ケンダル・ウォルトン、ステファヌ・マラルメ」、『ETUDES FRANÇAISES』27、2020、pp. 201–223.

— TACHIBANA (Fuhito), « La ‘sans-mondialité’ en tant qu’impossibilité fictionnelle », Société internationale d’études sur la fiction et la fictionnalité, Cicago University, le 2 Mars, 2022.